

# 外国語のコミュニケーションにおける「見方・考え方」 「論理性」を育てる授業と効果の検証について

櫻井健一郎<sup>\*1</sup>・石川美佐子<sup>\*1</sup>・桑原 里美<sup>\*1</sup>・後藤 大雄<sup>\*2</sup>  
高橋 俊章<sup>\*3</sup>・松谷 緑<sup>\*3</sup>・藤本 幸伸<sup>\*3</sup>・猫田 和明<sup>\*3</sup>

Effects of Teaching English Conversation Skills with Special Reference to Logical Thinking

SAKURAI Kenichiro<sup>\*1</sup>, ISHIKAWA Misako<sup>\*1</sup>, KUWAHARA Satomi<sup>\*1</sup>, GOTO Daiyu<sup>\*2</sup>,  
TAKAHASHI Toshiaki<sup>\*3</sup>, MATSUTANI Midori<sup>\*3</sup>, FUJIMOTO Yukinobu<sup>\*3</sup>, NEKODA Kazuaki<sup>\*3</sup>

(Received August 3, 2020)

キーワード：見方・考え方、論理性、コミュニケーション能力、即興的「やり取り」

## はじめに

これまでの研究実践においては、新学習指導要領で示された「見方・考え方」を働かせる範囲を、「情報を整理」し、「考えを形成、再構築」という狭い領域で捉え、その中で論理的で説得力のある議論ができるためにどのような指導が可能かを考察してきた。しかし、「見方・考え方」はディベートなどの活動で論理的思考をしている時だけ働くものではなく、「やり取り」を含めた言語活動全般に関わると考えられる。そのため、本研究では「見方・考え方」を働かせるということが何を意味するのかをきちんと再確認し、その理解に基づいて、「見方・考え方」をどう育てたかを記述・検証することとした。

また、これまでの研究では、一問一答を超えた、「やり取り」を即興で行うためにどのように指導すれば良いかを研究して来た。引き続き、会話をどのように継続・発展させるかという指導が重要となるのは間違いないが、それに加え、事前に準備できない、即興的な「やり取り」においても、論理的で説得力がある「やり取り」をどうすれば実現できるのかについても検討した。

最後に、これまでの研究では、各学年や学期ごとの到達目標を設定して来たが、生徒の発達段階と到達目標が一致しているか、また、生徒が主体的に取り組みたいと思う活動になっているかについてさらなる検証を行い、どのようにすれば、生徒が活動に主体的に取り組もうとする動機を高めていけるかを明らかにすることを目的としている。

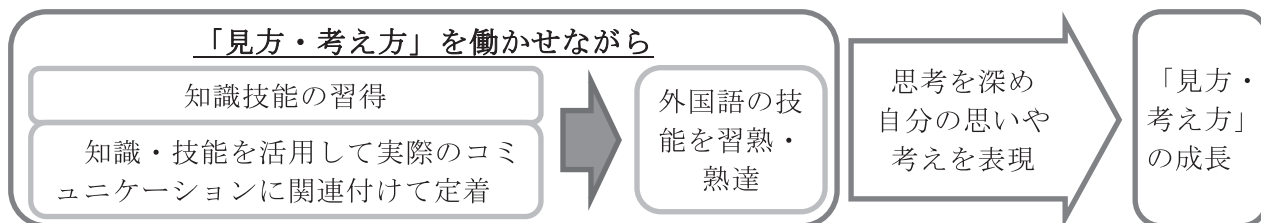
## 1. 「見方・考え方」に関する共通理解

新学習指導要領の各教科等の目標で「見方・考え方」という言葉が示された。「見方・考え方」とは、端的に表現すれば、教科等の特質に応じてどのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという物事を捉える視点や考え方のことである。小中の附属学校園と大学教員が連携して研究実践を行うことから考えると、この「見方・考え方」に関する共通理解を得ることが不可欠となる。このことを理解する上では、平成28年度の6月の段階で外国語ワーキンググループより試案と示された「平成28年度中学校各教科等担当指導主事等連絡協議会 伝達事項」に示されている以下の図を見るのが分かりやすい。

以下の図から明らかなように、学習者は、学習開始時点で獲得していた教科ごとの「見方・考え方」（英語の場合言えば、英語の「見方・考え方」）を働かせながら、知識技能を習得し、それをコミュニケーション活動を通して繰り返し活用することで英語の技能を高めて行くということが示されている。そして、知識技能を繰り返し活用してコミュニケーションを行う際、例えば、問題解決など思考・判断が要求される

\*1 山口大学教育学部附属山口中学校 \*2 山口大学教育学部附属山口小学校 \*3 山口大学教育学部英語教育選修

ような課題に取り組んだり、自分の思いや考えを表現したいと心から思う課題に取り組んだ場合に、情報の整理が必要になったり、考えの整理・再構築が必要となるため、「見方・考え方」の変容が起こり、英語の「見方・考え方」に成長がもたらされると考えられる。



以上のことに関して、外国語ワーキンググループは、次のように述べている。

「社会や世界、他者との関わりの側面から言語を捉え、外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、外国語を聞いたり読んだりして情報や自分の考えなどを形成・整理・再構築し、それらを活用して、外国語を話したり書いたりして適切に表現し伝え合うために考えること」(H28/6/20 段階 外国語ワーキンググループより(試案) 平成28年度中学校各教科等担当指導主事等連絡協議会 伝達事項)

上記に書かれているように、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、どのような内容をどのような表現を用いて話したら良いかを思考・判断して表現することが必要とされており、小中を通して育てる能力・資質が上記の目的に沿った内容になっている必要がある。難しく聞こえるかも知れないが、このことは小学校段階でも可能なことである。例えば、『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック 授業研究編2』では、自分の夏休みの思い出を相手に伝える活動について以下のように書かれている。

本活動で大切にしていることは、何を伝えると「一緒に過ごしてみたいな」と相手に思ってもらえるか、そのためにどの言語材料を使うとよいかを児童自身に考えさせる(選ばせる)ことである。

I went to ~/I enjoyed ~./It was ~.などの言語材料を、「意味」が分かった上で、夏休みの思い出を伝え合うという「場面」の中で、その言語材料を使う「目的」(自分の夏休みの思い出の楽しさを相手に知ってもらうことなどの目的)をもった上で使用させる。そのことが、「深い学び」の実現には欠かせない。つまり、児童が、「意味」と「場面」、「目的」を結び付けながら言語材料を使用して言語活動に取り組んでいるという状態にすることが大切である。(文部科学省, 2017, p. 88)

上記の例では、夏休みの思い出について相手に伝える際、相手に面白さを実感してもらうにはどのような表現や内容を選択する必要があるかを考えなければならない。このような活動の時には、英語の「見方・考え方」が働いていると考えられる。

また、以下の引用も小学校段階の活動について記述したもののだが、中学校段階においても、コミュニケーションをしようとするときに、本当に伝えたいと生徒が思うような活動でなければ、主体的に活動に取り組むことを期待するのは困難である。

誰かになりきって何かを話したり、架空のことを話したりさせるだけではなく、本当の自分自身の考えや気持ちを表現させることが非常に大切である。自分が海で食べた新鮮な魚がとてもおいしかったということを伝えたくて“I ate fresh fish. It was delicious.”と言っているのと、本当は海に行っておらず魚も食べていないため、そのおいしさを実感していないのに、そのようなことをしたことにして、“I ate fresh fish. It was delicious.”と言っているのとでは、取組に大きな違いがでる。自分が本当に感じたことや経験したことを伝えたいと思って言語材料を使用させることを大切にしたい。(文部科学省, 2017, p. 88)

## 2. 児童が主体的に会話をしたくなる活動の工夫：小学校高学年の段階

小学校においては、中学校以降の英語教育におけるコミュニケーション能力の素地を作ることが目標となる。これは、今回の研究のテーマで言えば、「論理性と説得力のある議論ができる能力」の基礎となる資質・能力の育成を目標とするということになる。本実践では、小中連携を考慮して小中学校共同で設定した小学校段階での目標「生徒が主体的にやり取りをしようと思える状況の中で、相手に配慮してコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を念頭に置きつつ、「目的や場面、状況に合った語句を用いながら、自分の気持ちや考えを相手に伝えようとしている姿」をめざして授業を仕組んだ。

本実践では、主体的にコミュニケーション能力に取り組む態度を育てるため、言語活動を積み重ねる中で生徒から出て来た要望に合わせ、フードコートで売る・買うという現実に近い「本物の」場面・状況を用いることとした。本番では、児童が自分の店で販売したい世界の料理を自由に並べるようにした。商品は絵や写真を使って児童が手作りしたもので、それぞれの店が個性的で魅力的だった。そのことにより、それぞれの児童が心から、英語を使って商品を売ったり、買ったりすることを楽しむことができるようにした。

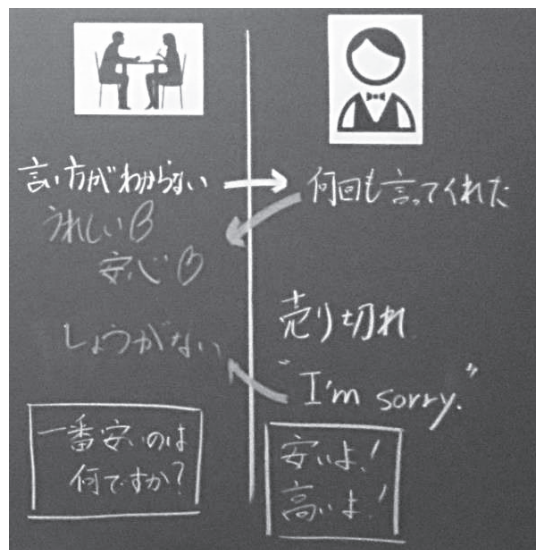
次に、場面や状況において使用する表現を適切に選択できるようにするため、授業の導入として、Small Talk を用い、場面や相手の様子に合わせて、適切な表現を選びながら注文時や販売時のやりとりができるように繰り返し練習した。ただし、取り扱う表現は、値段を尋ねる場合の表現 (How much?)、割引をして欲しい場合の表現 (“Can I use a discount coupon?”)、割引を店側が申し出る場合の表現 (“Do you have a discount ticket?”) など、言語活動を繰り返す中で児童自身が必要と感じたものを随時取り入れるようにし、児童の主体性と意欲が高まるように配慮した。

また、場面や状況の違いによって、“What would you like?” や “What do you want?” のように丁寧度が異なることを理解できるように様々な支援を行った。支援の1つは、ALTと担任で実演し、2つの表現を使った時の丁寧度の違いを表情や言い方や雰囲気で見つけやすいようにした。また、注文をする側、注文を受ける側の2つの立場を児童に経験させた後、良いやり取りについてクラス全体で振り返る活動を行った。そのことにより、“What would you like?” の方が丁寧に接客できて良い、店員になった気分で話せるなど、表現に対する気付きを児童自身から得るようにした。

毎時間の振り返りでは、店員と客の2つの立場でよかったやり取りを振り返るよう促した。本時の振り返りでは右の図に示した振り返りが見られた。

例えば、子どもたちは「メニューの言い方がわからないとき、店員役の子が何回も英語で言ってくれたおかげで、安心して注文できた」ことや、「売り切れのとき “I’m sorry.” ときちんと店員役の子が言ってくれたことで、しょうがないと思えた」ことを振り返った。これは、言語材料を言語の働きとともに用いる子どもの姿と言えるであろう。また、「一番安いのは何ですか?」や「安いよ! 高いよ! (客引き)」など、表現の幅を広げたいという意欲の高まりが見られた。

子どもたちが、目的や場面、状況に合った語句を用いながら、自分の気持ちや考えを相手に伝えようとしていることから、相手に配慮してコミュニケーションを図る態度を育成することができたと考えている。



### 2-1 考察

本物に近い場面・状況を設定すること、児童の伝えたい気持ち（児童のニーズ）を大切にすること、言語活動後の振り返りを行うことによって、場面・状況における英語表現の違いに気づき、また、場面や状況の違いによって、使用する表現を選択し、主体的にコミュニケーションを取ろうとする態度を身につけることができることが分かった。また、Small Talkなどの活動を通し、何度も場面や状況の中で英語表現を使うことで、児童が即興的に英語表現を使用できるように支援できることが分かった。何よりも児童が「やってみよう」という気持ちを重視することで、児童が主体的にコミュニケーション活動をしようとする意欲を高め

ることが分かった。

## 2-2 課題

この単元の学習を通して、主体的に活動を豊かにしていく子どもの姿はみられたが、その後の単元で同じように支援をすると、子どもたちは、言いたいことを優先するため、発音が分からない単語を用いたり、相手が理解できない表現を使ったりしていた。子どもたちが表現したいことを、要点をおさえて、全体で確認したり、練習したりする場面が必要だったと考えられる。

本実践では、フードコートという設定をして活動したことによって、児童に店員や客の役割を演じさせることで、相手との関係を意識しながら、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じたやり取りを体験させることができた。一方で、海外の様々な料理がフードコートに並べられたものの、それらを通して世界の食文化に意識を向けるための時間と手立てが十分ではなかったため、この点に関しては課題としてさらに研究を続けていきたい。

## 3. 会話（やり取り）を通して相手から多くの情報を引き出す工夫：中学校1年生の段階

第1学年では「情報を引き出す」ことをねらいとした授業実践を行った。より多くの情報を引き出すことに必然性をもたせるため、『友だちWikipedia』を作ることを目的に設定した。また、情報を引き出すための手段として、疑問詞を使った即興でのインタビュー活動を行うこととした。

生徒は今までに、小学校での外国語活動を含め、相手に尋ねる様々な表現を学んできている。疑問詞で始まる疑問文もいくつか学習し、それぞれの疑問詞をどのようなときに使ったらよいかを理解している。また、疑問詞で尋ねることで、Yes/Noの単純な回答ではなく、より詳しい答えを相手から聞き出すことができるという便利さも実感している。しかしながら生徒は、これまで、「この単元ではwhereを使って場所について尋ねる」というように、使う疑問詞が一つに絞られ、あらかじめ場面設定がされた、いわば与えられた枠の中でしか、疑問詞を使った表現に親しんでいない。使用する表現に制約を受けない実際のコミュニケーションにおいて、自分が尋ねたいと思った事柄に応じて、適切に語彙を選択して表現するには至っていない現状があった。

疑問詞を使った質問は、コミュニケーションに欠かせないものであり、初対面や相手のことをまだよく知らないとき、あるいはその人のことをもっと知りたいとき、疑問詞で始まる質問は情報を引き出すのに役に立つ。例えば、和食が好きな相手からさらに詳しく情報を引き出したいとき、“Do you like sushi? Do you like tempura?...”と、料理名をいちいち挙げて尋ねたのではきりが無い。そこで、“What Japanese food do you like?”と疑問詞を使って尋ねれば、相手からより詳しい情報を効率的に引き出せる。さらに、“How often do you eat it?”と頻度を尋ねれば、相手の和食好きがどれくらいなのかを具体的に知ることができる。このように、疑問詞を使って試行錯誤しながらインタビュー活動を行うことで、見方・考え方を働かせながら、さらに詳しい内容について尋ねることができる考えた。

### (1) 情報を引き出す目的を設定する。

クラスメートに即興でインタビューをして情報を引き出すという活動の前に、次の2つのことを行った。

- ①即興でできるだけたくさんの質問をするイメージをもたせるため、VOGUEの‘73 Questions’のインタビュー動画を見せた。
- ②活動に必然性をもたせるため、『友だちWikipedia』をつくるというゴールを設定し、実際のWikipediaの特徴を全体で共有した。

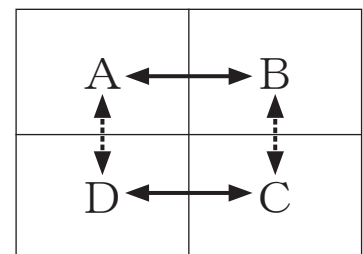
### (2) 即興インタビュー (1)

3分間ペアに質問をし、相手に関する情報をできるだけ詳しく引き出す。

ペア1…A-B、D-C      ペア2…A-D、B-C

### (3) シェアリング (1)

1回目のインタビューを行った後、生徒Aの情報をBとD、生徒Bの情報をAとC、生徒Cの情報をBとD、生徒Dの情報をAとCで共有した(図1)。生徒は、情報量の少なさや偏りに客観的に気づき、2回目



のインタビューでどのような質問をすればよいかを考えた。

#### (4) 即興インタビュー (2)

シェアリング (1) をもとに、再びペア 1・ペア 2 でインタビューを行った。

#### (5) シェアリング (2)

Wikipediaとしてまとめる前に、インタビューで得た内容を書き出し、シェアリング (1) で情報共有した相手と、再びシェアリングを行った。付箋紙に書き出した情報を、ペアでお互いに見せ合いながら整理したり取捨選択したりしていった (図 1 参照)。

#### (6) 『友だちWikipedia』を作る。

シェアリングで整理した情報をもとに、インタビューした相手のWikipediaを作成した。内容をトピックごとに分けたり、書く順番を工夫したりしながら進めた。また途中で、情報が不足していると感じたり、さらに具体的な情報を得たいと感じたりしたときは、再度インタビューをしてもよいこととした。必要に応じて情報を足しながら、読み手を意識して作成する姿が見られた。

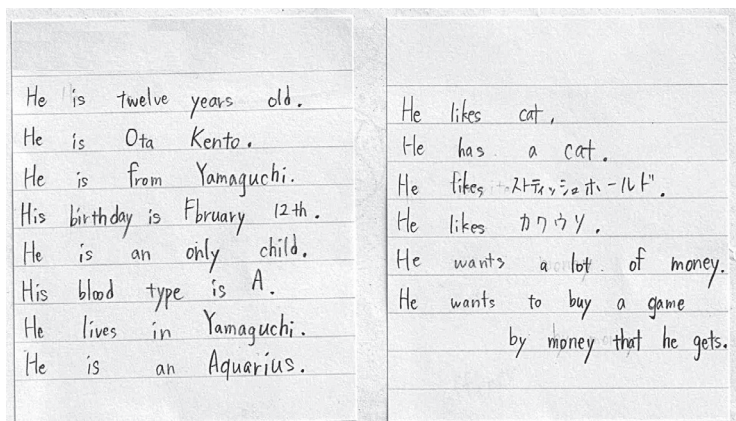


図 1 : 書き出した情報の整理

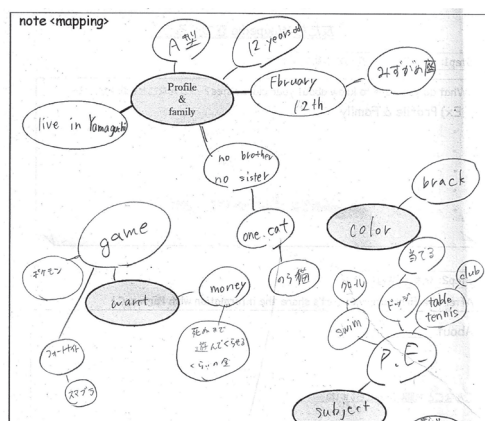


図 2 : 情報を視覚化して整理

### 3-1 考察

『友達 Wikipedia』を作るという課題を設定することにより、到達目標を明確に意識させ、相手から情報を得る必然性を高めた。また、同じ人についてインタビューをした別の生徒とシェアリング (情報交換) することにより、自分では気づかなかった質問の内容や観点、尋ね方について理解を深めることができた。また、2回目のインタビューにおいて、さらに広く、深く質問し、さらに情報を集める意欲を高めることができた。例えば、振り返りに「自分は、相手がピアノを習っていることしか聞き出せなかったけど、Aさんは、Whenをつかって、いつ練習しているのかも質問していた。そのあと、B君にWhen do you practice soccer? と聞いたので、よかった。」と書いていた生徒がいた。

さらに、セマンティック・マッピング (図 2 参照) を活用して情報の関連性や具体性を視覚化させた。情報を視覚化して整理することにより、直感的に他にどのような情報が必要か (どんなことを尋ねる必要があるのか) 意識して話すことが出来るようになった。また、そのことにより、質問する話題を変更して情報を得る方法に加え、同じ話題について○は好きか、大好きな○は何か、などのように質問を掘り下げることが可能ということを意識し、質問によって会話を発展させることができるようになった。

### 3-2 課題

インターネット上で誰もが閲覧できるWikipediaの特性を生かすならば、生徒の作品を掲示したり冊子としてまとめたりすることが、この学習活動の締めくくりに相応しいと考える。しかし、生徒本人や家族のプライバシーを考慮すると、実行がなかなか難しかった。これは「Wikipediaを作る目的は何か」を明確にできていなかったことに要因があると考えられる。活動に必然性をもたせることの重要性を考え、学習の見通しを詳細にもつことが大切であると痛感した。

#### 4. 「会話（やり取り）」に論理性や説得力を持たせる工夫：中学校2年の段階

「話すこと（やりとり）」の能力を高める際、単に会話を継続することを目的とするのではなく、論理的な思考や説得力を意識して会話する能力の養成も重要となる。今回のプロジェクトでは Mini Discussion を用いて、即興的な会話の中で論理性や説得力を意識させることを目的とした。Mini Debate でも論理性を意識させることができるが、話す内容に関して事前に準備することが多い。また、決まった順序で意見を交わしていくため、「やり取り」の即興性にやや欠けている。

ただし、いきなり Mini Discussion に移行することは難しいので、前段階の活動として Small Talk や Mini Debate に加え、「夢の夏休み（理想の計画）を質問で探ろう」という課題を設定し、以下の2つのことを練習した（以下で後述する）。

① 会話の内容を整理して話すための方法について練習

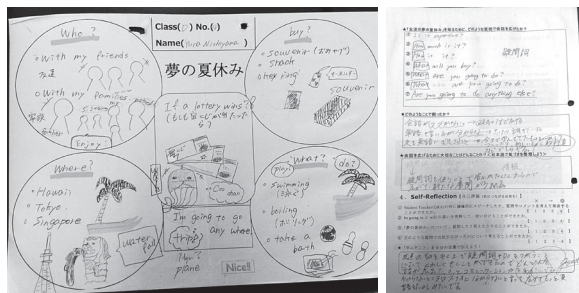
② 相手の短い発話に対して即興で反応して、会話を広げるための練習

課題選択の理由は、生徒が「知りたい」という興味・関心を高め、質問で会話を広げやすいと考えたためである。相手のプランを、5W1Hの関連した質問をすることでより詳しい情報を引き出すことをメインの言語活動に設定した。

①の活動に関しては、何を話して良いか分からず戸惑う生徒のことを配慮し、絵とセマンティック・マップングを用いて事前に話す内容（表現ではない）について準備させた。即興性は薄くなるが、話す内容と即興的に話すこと（その場で話す表現を考えて話すこと）の両方を同時に求めると負担となるため、今回はこの方法を用いた。なお、事前に分かっていた予定を表す際に用いる be going to が目標文法構造であったことも話す内容を事前に準備させた理由の1つでもあった。

②では、Yes/No Questions に加え、5W1HのWH疑問文が会話を展開する上で重要な役割を果たすことを『夢の夏休み』についてのやり取りを通して実感させるようにした。具体的には、予定の内容をひとまとまりで話すのではなく、1～2文程度で小出しにするように指示し、聞き手が話し手から追加で情報を求める（質問する）ことが必要な状況にした。また、活動後の振り返りを通し、疑問詞を使った質問では Yes/No で答えることができないので、具体的な情報を引き出すことができるといった生徒の気づきをクラス全体で交換することができた。

- What are you going to do there?
- How are you going to go there?
- What kind of museum are you going to visit?
- How long are you going to stay there?
- How much is it?
- What will you eat/buy there?
- What else are you going to do?
- 相手のことを詳しく聞く質問（好みや経験など）
- 疑問詞を使った質問 → Yes/No で答えられない → 具体的な面白味のある答えになる
- 他の質問でも → 展開、発展していく



次に、2年生の最終段階の活動として、Mini Discussion を行った。この活動には、論理的に考えつつ、相手を説得する「やり取り」の能力が求められるため、2年生の1学期から Small Talk や Mini Debate などの帯活動を行ってこの活動に入る素地が出来るように準備を進めて来た。

Mini Discussion の形式は、ペアが、“Which is more important to you, health or money?” というトピックについて話し合いを行い、その内容に関して、聞いている残りの人が意見を述べるという形式で行った。例えば、ペアの A さんが①健康があってこそ働け、お金も稼ぐことができる、②健康でなければ、お金があっても使えないといった理由を述べて、健康の方が大切だと主張した。それに対して、B さんは①お金があったら大きな家を買うなど何でもできる、②病気になってもお金で治療を受けることができるという理由を述べてお金の方が大切だと主張した。それに対して、議論を聞いていた C さんはお金では愛情は買えないこと、D さんはお金では時間は買えないと主張した。それに対して、B さんはみんなお金をたくさん持つ

ている人が好きだから、愛情もお金で買えると反論した。お金の問題については、EさんがBさんの意見をサポートし、お金があれば飛行機を使うことができ、東京まで早く到着できるので、お金で時間も買えると反論した。今回は、ペアが意見を述べた後、教師が進行役をつとめて、クラス全体で討論を行う形を取ったが、最終的には生徒同士でディスカッションを進行できるようになると理想的である。そのような課題があるとはいえ、論理性や説得力を意識しながら、会話のやり取りを行う活動の一例として大きな意義があるのではないかと考えられる。

Topic: “Which is more important to you, health or money?” (生徒同士のペアワーク→他の生徒からの質問)

A: I think that health is more important than money.

B: Why do you think so?

A: There are two reasons. First, if I'm healthy, I can work hard. If I work hard, I can get a lot of money. If I have a lot of money, I can buy many things and I can go to many places. I can enjoy my life. Second, if I'm not healthy, even if I have a lot of money, I can't use them and I can't go to many places. So I can't enjoy my life. For these reasons, I think that health is more important than money. How about you? What do you think?

B: I think that money is more important than health. That's because ①if I have a lot of money, I can do everything. For example, I can buy a big house and I can go anywhere. ②If I become sick, I can go to the hospital and get some medicine with money. For these reasons, I think that money is more important than health.

T: Thank you. What do you think about their opinions, everyone? (2人の意見について他の生徒に聞く) Mr. A said, “①if I have a lot of money, I can do everything.” Is that right? Can you do everything if you have a lot of money? (全体に問う)

C: ...No, we can't buy love with money.

D: We can't buy time!

B: Oh, we can buy love with money! (A) rich man is popular. Everyone like (s) (a) rich man and money.

T: What do you think about time? (全体に問う)

E: I can buy time with money. That's because if I have a lot of money, I can go to Tokyo by plane, not Shinkansen. (A) plane is faster than Shinkansen. ※ ( ) は生徒の発言で抜けている部分

T: Oh, I see. Mr. A said, “②If I become sick, I can go to the hospital and get some medicine with money.” What do you think?

F: Bad disease, doctors can't cure.

T: Oh, I see. There are still some serious diseases doctors can't cure. That's true. ...

#### 4-1 考察

Mini Discussionを用いることで、即興的な「会話(やり取り)」の中でも、論理性や説得力を意識させながら、練習を行うことが可能であることが分かった。一般的に、論理性や説得力を意識した活動といえば、Debateが思い浮かぶが、原稿や言うことをある程度先に準備できることを考えると「即興性」が薄い部分もあった。また、Debateでは、決まった手順で意見が交わされるため、日常の会話のやり取りとは異なる面もあった。今回の取り組みにおいては、日常の会話の流れに近い「会話(やり取り)」の中で、即興性と論理性・説得力に焦点を当てた活動が可能ということを示すことができたことは重要な意味を持つと考えられる。Discussionをする上で、相手の意見に対して即興的に反応をし、会話を発展させていくことは困難だが、ペアの意見を聞いた後、クラス全体で意見をシェアする今回の方法であれば取り組み易く、導入しやすい方法と考えられる。

## 4-2 課題

上記で述べたように、Mini Discussionでは教師が進行役をつとめて、クラス全体で討論を行う形を取った。例えば、①のような「お金があれば何でもできる」という意見に対して「そうかな？どう思う？」と問いかけ、生徒の意見を促した。今後の課題としては、①や②のような疑問や指摘が、生徒から出て来るようになれば議論が発展するのではないかと考える。そのためには、Small TalkやMini Debateをもとにdiscussionへとつなげていくような機会を増やし、帯活動などで続けていくと練習効果が期待できるのではないかと考えられる。

## 5. まとまりのある内容を即興で伝える取り組み：中学校3年の段階

国立教育政策研究所から出された平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の調査結果から明らかになった読むことに関する課題として、「社会的な話題について、まとまりのある文章を読み、書き手が最も伝えたいことなど大切な部分をとらえること」「読んだ後に自分の考えを示すことができるよう、話しの内容や書き手の意見などを主体的にとらえること」があげられている。また、指導要領には、社会的な話題についてまとまりのある文章を読み、それに対して自分の考えを示すことができるようになる能力を養成する必要性が書かれている。

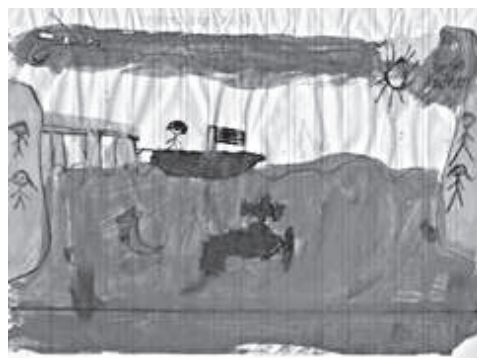
この課題の克服には、まとまりのある文章を読むことに慣れる必要があるが、苦手意識を持つ生徒が多いのが現状である。そのため、教科書3ラウンドシステム（1年で教科書を3回切り口を変えて学習する方法で、1回目は内容理解、2回目は音読、3回目はリテリングを目的として教科書の内容を繰り返し、まとまった文章への慣れを作ることができる）を用い、また、帯活動として、時事ニュースを平易な英語を使い、3分程度の読み物にして、概要把握を行う活動に取り組むようにした。そのことにより、まとまった文章への慣れを作るだけでなく、英文で書かれているニュースの面白さに興味を感じてもらうことも出来た。

Yoshino Akira has won the Nobel Prize for Chemistry together with John B. Goodenough and M. Stanley Whittingham. The three scientists were given the prize for their research on the lithium battery. This battery has changed the world. Older batteries were weaker, and they were much bigger. Lithium batteries are strong and much smaller, and they can be recharged many times. They power many things such as mobile phones, computers, and electric cars. Thanks to discoveries by Whittingham and Goodenough, Yoshino was able to create the first workable lithium battery.

- ① タイトルは？ A : Nobel Prize Changes the World. B : Lithium Leads to the Nobel Prize.  
② リチウム電池の特徴を二つ書いてください。

まとまった英文への慣れと興味が高まった段階で、3年生の最終段階の活動として、まとまった英文をジグソーリーディング形式で読み、重要な内容を他者に伝える活動を行った。題材は、“What Is the Most Important Thing to You?”

(Sunshine, Program 7)を用いた。生徒たちは、右のような絵を4つ示され、それが何を表しているのか、また、なぜ、ある国・地域の子どもたちにとって絵に描かれた物が一番大切なのかを予想した。次に、予想した4つの絵についての解説文をジグソーリーディングの形式で、それぞれの担当者（エキスパート）だけが読み、自分のグループに必要な情報を持ち帰るように指示した。



生徒たちは4つの絵を見て、それが何か、また、なぜそれがある国・地域の人にとって大切なのかを予想した。絵を見て、多くの生徒から「これ何？」「なんでバケツ」などの反応が出た。この段階を経ることにより、ジグソーリーディングで各担当者が持ち帰る情報は、生徒たちにとって聞きたい・知りたい内容になっていたと考えられる。

また、各解説文の分量は平易な文章に書き換えてはいるが、意図的に分量の多いものを用いた（リテリン



グの時間を制限し、数多くある情報を全て伝えることが困難になるようにした)。これは、各担当者がすべての文章や内容を記憶して伝えることを難しくし、伝える上で重要なポイントを取捨選択・整理して持ち帰り、自分の言葉で伝えることを目的にしていたためである。

3年生までの英語の授業でセマンティック・マッピングの方法を活用してきたが、今回の授業においてもその方法を用い、英語の表現をそのまま書き写すのではなく、キーワードを用いて視覚的に図式化して情報を整理し、それに基づいてリテリング（ジグソーリテリング）を行うように指示した。

書いてある内容を取捨選択・整理して伝えることを即興で出来れば理想だが、中学校3年生の段階でもまだ負荷が高いのが実情である。そのため、最終的に自分のグループに持ち帰ってリテリングを行う前に、エキスパートだけで集まり、その中で即興で伝える練習を行った。その際、内容の間違いや分かり難かった点についてフィードバックを受けてリテリングの内容を修正できるようにした。生徒は文章を読みながら内容の中心となる部分や班員の気になる点に関する情報をメモし、それを元にリテリングを行っていた。文章中にある未習語（訳つき）をそのまま使うのではなく、パラフレイズしたり、ジェスチャー等を用いたりして説明していた様子が大変印象的である。

Note (Balloons)

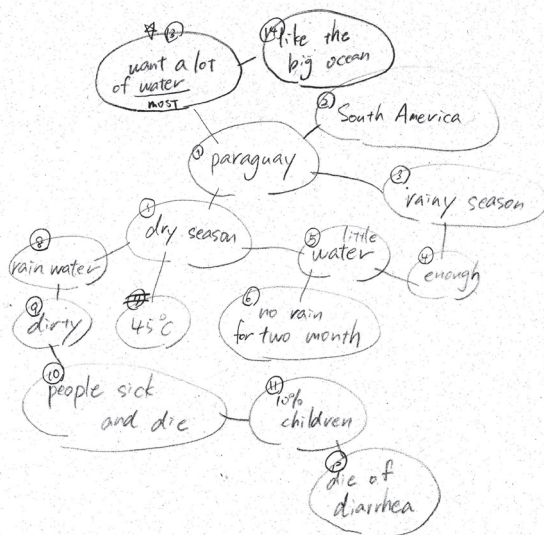


図3：リテリング用に作成した生徒のメモ

Enough water is the most important thing to a boy in Paraguay.

In Paraguay, there is rainy season and dry season. In rainy season, there is enough water, but in dry season, people can get little water. There is no rain for two months in dry season. If they can't get enough water, they use rain water. But it's very dirty. So it makes people sick and die. In Paraguay, 10 % children die of diarrhea. Diarrhea, you often go to the toilet and like water. (ジェスチャーで示しながら)

So the boy wants a lot of water like the big ocean.

図4：メモを元にした生徒のリテリングを文字起こしたものを（誤りもそのまま）

このような段階を経て、最終的に自分のグループに戻って絵の内容についてリテリングを行った。各グループから、驚き、納得、興奮の反応が見られ、難易度の高い活動でありながら、生徒たちが夢中になって取り組んでいる姿が見られた。

### 5-1 考察

まとまりのある内容を読んで、その内容を即興で伝えることは中学校3年生でも困難なことが多いのが現状である。本プロジェクトでは、ジグソーリーディングの形式でまとまりのある内容の文章を読んで、他の生徒に伝える活動を行った。3ラウンドシステムや時事ニュースを用いた帯活動を用い、また、セマンティック・マッピングの形式で話す内容をメモする練習を事前段階にしておくことで、伝える内容を取捨選択・整理して、長文の内容を相手に伝えることが可能ということを示した。また、最初に絵を示し、なぜ世界の子もたちがその絵に示したことを重要だと考えているのか考えさせたことにより、持ち帰る情報が話し手と聞き手にとって興味や関心を持つ内容に変えることが出来た。さらに、扱った内容についてであるが、世界の子もたちが重要と考えるものと自分たちが重要と考えるものにギャップがあり、そのことが新鮮な驚きだったことも生徒の興味を高めた理由になっていると考えられる。

## 5-2 課題

年度当初にまとまりのある文書を読むことに関して聞き取り調査を行ったところ、まとまりのある文章を見ただけで嫌気が差すとか、読み進めても何が書いてあるかわからないと答える生徒がいた。しかし、今回の活動を行った後に再度聞き取り調査を行うと、そのような生徒はほとんどいなくなり、日々の取組が一定の成果をあげたと考えられる。ただし、英文を読むことは大変な作業であるという意識に大きな変化はなかったため、今後とも指導の継続が必要である。

マッピングを用いることで即興でのやり取りや読んだ内容を相手に伝える際に、伝えるべき情報を取捨選択したり、整理したりすることができるようになったと答える生徒が多かったが、情報は教員から与えられたものであった。今の時代は、世界中からの情報が溢れ、いつでもどこでも簡単に手に入れることのできる世の中であることを考えると、今後は、生徒が自分自身の考えをもって情報を集め、その中から重要なことを読み取り、取捨選択できるように、そういった読解力と課題解決能力を英語の授業の中でも身につけさせていきたい。

## 6. プロジェクトの成果

新学習指導要領では、外国語によるコミュニケーションにおける「見方・考え方」を働かせ、コミュニケーションの目的を理解し、見通しを持って目的を実現するために聞くこと、話すこと、読むこと、書くことによる総合的な言語活動を行うことを通して、簡単な情報や考えなどを外国語で理解したり表現したり伝え合ったりすることができる資質・能力の育成が目標とされている。本プロジェクトでは、見方・考え方に関しては、「論理性」に焦点を当て、また、5つの言語領域に関しては、「話すこと（やり取り）」の領域に焦点を当てた。また、「話すこと（やり取り）」において、教育現場において関心やニーズが特に高い、「即興性」に焦点をあてつつ、どのように小・中学校の英語の授業を通し、英語の見方・考え方に関する知識・理解や技能を深めて行くことができるかについて研究を行った。論理的で説得力のあるやりとりができるようになるための指導方法と評価方法の確立という現代的な教育課題に附属・学部で協同的に取り組むことにより、課題の解明を達成した。また、同時に児童や生徒の英語学習における主体性や意欲を高める工夫についても検討することができた。

## 参考文献

国立教育政策研究所（2019）：『平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査 報告書』

<https://www.nier.go.jp/19chousakekkahoukoku/report/19middle/19meng/>

文部科学省（2017）：『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック 授業研究編2 外国語』

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_2.pdf)

文部科学省（2018）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』

文部科学省（2018）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』

## 付記

中学2年生の授業は2019年5月24日（金）に実施、その他の授業は2019年11月22日（金）に実施したものです。